

金融英語の語源（1）：ラテン語の支配を覆したドル

Watabe, Ryo / 渡部, 亮

(出版者 / Publisher)

野村アセットマネジメント研究開発センター

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

ファンドマネジメント / ファンドマネジメント

(開始ページ / Start Page)

100

(終了ページ / End Page)

103

(発行年 / Year)

2008-03-25

金融英語の語源（１）

－ラテン語の支配を覆したドルー

法政大学教授 渡部 亮

世界の金融資本市場で圧倒的な勢力を誇っているのは米系の投資銀行であり、その母語は英語である。そこで本稿では三回に分け、金融業で頻繁に使用される英単語の語源を探ることによって、金融や経済の本質に少しでも近づいてみたい。

１．ラテン語とゲルマン語

英語は、6世紀頃からさまざまな外国語を採り入れることによって進化を遂げてきた。その語彙（単語数）の多さは、世界の主要言語の中でも群を抜くものがある。『研究社新英和大辞典』によれば、英語は「言語的消化不良の慢性症」に陥っているという。実際に、基本英単語2万語のうち、ラテン語源の単語が15%、ギリシャ語源が13%、フランス語源36%で、この三者を合計すると、2万語全体の64%を占める。なかでもラテン語の影響が大きい。アングロサクソン本来のゲルマン語源の単語は、2万語のうちの19%に過ぎない。

ラテン語はローマ近郊のラツィオに住む人々が使っていた言語であり、ローマ帝国の共通語となった。そのローマに関して、19世紀後半の高名なドイツ法学者ルドルフ・フォン・イェーリングは、『ローマ法の本質』という古い書物の中で、概要次のようなことを述べている。「ローマは三回世界に掟（おきて）を命じ、三回諸民族を統一した。一度目は武器によって諸国家を統一し、二度目はローマカトリック教会によって統一し、三度目はローマ法に

よって統一した」（原田慶吉監修訳の有斐閣刊を簡約化した）。

実際ローマ軍は、イングランドとスコットランドの境界線のあたりまで侵入し、英国東岸の町ニューカッスルと西岸の町カーライルをつなぐ線上に、ハドリアヌス長城（Hadrian Wall）を築いた。また、ローマはローマカトリック教を布教した。しかしイングランドはローマ法を継受せず、原始ゲルマンの慣習法をコモンローとして育てた。したがって、英国（イングランド）は、ローマによって二回しか征服されていないというのが通説である。しかし、英語がラテン語の影響を受けているという意味では、やはり三回征服されたことになるのではなかろうか。

日常生活で頻繁に使われる I、you、it のような代名詞、one、two、three のような数詞、at、on、in のような前置詞、eat とか do とか動作を示す動詞、さらには hand とか stone のような具象物、農耕・牧畜・航海・漁業関係の単語には、圧倒的にゲルマン語源の単語が多い。しかし、経済や金融、政治の世界で使われる抽象概念になると、ラテン語源やギリシャ語源の単語が途端に多くなる。金融業は money（貨幣）を扱うが、その money や mint（鋳造所）は、ローマ時代に貨幣を鋳造した神殿 monēta に由来する。

そもそもアルファベットは、日本でローマ字といわれるように、ラテン語を表す文字体系である。さらに遡れば、アルファベットはフェニキアの象形文

字がギリシャ文字のアルファ alpha やベータ beta として受け継がれ、それがローマ字に転写されたものである。アルファは牛を、ベータは家を象形した文字であった。

英語がラテン語の影響を受けたのは、ノルマン人が11世紀にアングロサクソン王国を征服したという英国史によるものである。ノルマン人とは、フランス北部に住んでいた北の人 (north man) というような意味である。征服後の数世代の間、イングランド中の重要な地位が、フランス語を話すノルマン人によって占められ、当時の英語 (ゲルマン語系言語) は、下層階級の言葉とされた。フランス語は、ラテン語に源流を発するフラマン語系言語だから、ノルマン人の征服は、英国にラテン語を持ち込むことになったのである。

経済学者ジョン・メイナード・ケインズの祖先も、征服王ウィリアムの家臣としてイングランドに渡った。そのため Keynes という苗字の発音が、通常なら「キーンズ」というべきところを「ケインズ」といった異例の呼び方になっている。ちなみにロンドン近郊には、Milton Keynes (ミルトン・キーンズ) という町が存在する。また第二次大戦直後の日本でも、最初はケインズと読むことができず、ケイネスとかキーンズと呼んでいたという。

2. 米語による簡素化

こうした歴史的経緯が存在するため、一つの事物や事象を表すのに、英語には、ゲルマン系単語とラテン系単語の二つが存在する場合が非常に多い。例えば「美しい」には pretty と beautiful が、「短い」には short と brief が、「建てる」には build と construct が、「最後」には last と final が、「負かす」には beat と defeat がある。いずれも前者がゲルマン系、後者がラテン系である。

英語は、語彙が非常に多く煩雑な言語であるが、それでも米国英語 (米語) の発達によって相当に簡易化された。もともと米語の特色は、理路整然たる分かりやすさにある。英国人が歴史的思考を得意とするのに対して、米国人はシステム思考が得意なため、米国の独立戦争以後、ノア・ウェブスターなどが中心となって、実用的で平易な言語とするための努力がなされた。

米語における一つの工夫例は、二字熟語や合成語の多用である。英国英語が難解な語彙を多用するのに対して、米語は平易な熟語を多用する。人事 (personnel) を人的資源 (human resources) といい、債券 (bond) を確定利付き (fixed income)、不動産 (property) を実物資産 (real estate) といった具合である。

これは米系投資銀行の国際ビジネス拡大のおかげでもある。そのほかにも road show (新規発行案件の投資家向け勧誘) や beauty contest (引受業務の入札方式での受注) など、あたらしい業務手法と用語を導入した。また証券引受や M&A の資産査定において使われる due diligence もその例である。due とは「責任や義務がある」という意味であり、また diligence は「勤勉さ」や「注意深さ」を意味する。いずれもラテン系の単語だが、これをゲルマン系単語で言い換えれば reasonable care (相当の注意) ということになる。ディールの当事者には、受託者として注意義務が求められるのである。

このように英語の発展史を概観すると、古代の原始ゲルマン語に代わって、中世にはラテン語が侵入し、それが近年になって米語の普及によって、主流国際言語としての地位を確立したといえる。ひとつには、サービス経済化やグローバル化が、簡素な米語を普及させたという側面もある。サービス産業の大半は対人ビジネスだから、言葉によ

るコミュニケーションが必須である。英語は投資銀行の国際ビジネス戦略の一環でもあり、また非英語圏でも英語が必須のスキルとなって、所得も英語力に比例するようになった。

もっとも長期的にみると、中国語やスペイン語が国際言語として台頭する可能性が高く、英語の優位が不動というわけではない（注1）。

3. dollar はチェコの谷間の銀

ラテン語源の単語が優勢な経済金融英語の中で、ドル（dollar）はゲルマン系単語として異例の形で英語に持ち込まれた（注2）。

米ドルの元祖は、米国の独立戦争以前に北米で流通していたスペイン・ドル銀貨（メキシコ産の銀を使用）とされている。1ドルは8レアルに相当した。レアル（real）は、スペインの旧通貨の呼称で、英語の royal（君主）と同じ語源を持つ。サウジの通貨 riyal も同じ語源である。

トマス・ジェファークソンを始めとする米国建国の父たちは、すでに広範に使用されていたスペイン・ドルを独立後も米国通貨として採用した。というのは、当時の英国が重商主義政策により金銀正貨の国外流出を抑制したからである。米国内ではまだ金銀を産出せず、独自の鑄造力がなかったため、メキシコの銀貨を使わざるを得なかったわけである。そうした意味で、米ドルは発生当初からデファクトスタンダードであった。

ドルという名称のそもそもの発生地は、ボヘミア（現在のチェコ）であった。16世紀の初頭に、ボヘミア人の伯爵が領地内（チェコ語で Jáchymov、ドイツ語で Joachimsthal と呼ばれた町）の谷間で銀の採掘を始め、それをもとに銀貨も鑄造した。チェコ語で谷を意味する thal（英語の dale に相当）から派生して、このボヘミア銀貨を thaler（ターレ

ル）と呼ぶようになった。

その後ボヘミアは、ハプスブルグ家の支配下に入り、ターレルはハプスブルグ領内のドイツ、イタリア、スペインなどで流通するようになった。このうち最も有名なのが、1751年以降発行されたマリアテレジア・ターレルである。マリアテレジアが崩御した1780年に発行された同銀貨は、欧州や北アフリカで貿易決済に広く使用され、20世紀中葉までオーストリア国内でも流通した。ターレルは、ドイツではターラ（taler）、イタリアではタレーロ（tallero）、オランダではダールダー（daalder）、イギリスではダラー（rix dollar ないし単に dollar）と呼ぶようになった。

ドルは今では \$ と略称するが、かつては弗というように、S の上に二本の縦線を重ねて書いていた。これは U と S を重ね合わせたものだという説もあるが、スペインの古都セville を経由してスペイン・ドル（ターレル）が持ち込まれたため、セville（Seville）の S を採ったという説もある。それによれば、二本線の由来はスペイン・ドル銀貨に記されていた二本柱で、ジブラルタル海峡から地中海に入る場所にヘラクレスが建てたとされる二本柱を象形したものである。そのためスペイン・ドルは pillar dollar とも呼ばれた。

4. greenback は不換紙幣

ドル紙幣は、緑色を基調とする図柄に特徴があり、最初に発行された1862年以来 greenback と呼ばれてきた。当初の greenback は米国政府発行の不換紙幣であった。また1850年代以降には、buck というスラングも使われ始めた。Buck は牡鹿を意味するゲルマン系単語だが、牡鹿のなめし皮（buckskin）が、その昔米国インディアンによって通貨として使用された歴史にちなむものである（注3）。現在の

ドル紙幣も greenback の流れを受け継ぎ、1913年末に連邦準備法が制定されてからは、連銀券 (Federal Reserve Note) となった。

1 ドル紙幣には興味深い記述が多い。まず紙幣の表面にはジョージ・ワシントンの肖像があるが、その左上に小さな字で THIS NOTE IS LEGAL TENDER, FOR ALL DEBTS, PUBLIC AND PRIVATE と書かれている。「この紙幣は、公民を問わず、すべての債務の支払いを可能にする法貨である」といった意味である。貨幣には、金などの商品価値の裏付けを持つ商品貨幣と、法律や発行者の信用をもとにする法制貨幣 (法貨) がある。現在のドル紙幣は、合衆国の法律と連邦準備制度の信用に基づいて発行された法貨 (legal tender) である。そのため、決済などのためにドル紙幣を提示されたら、受け取らなければならないことを銘記しているわけである。

裏面の中央上部には、小さく IN GOD WE TRUST (我々は神を信頼する) とある。これは1957年発行の紙幣から始まったのだが、IN GOLD (金の裏付け) ではなく神の存在が信頼の裏付けなのである。法貨は、法権力によって強制されるという意味で、fiat money ともいわれる。この fiat は、let it be (存在せよ) という意味のラテン語である。創世記に神 (ヤハウェないしエホバ) は、最初に fiat lux (光あれ) と言って、昼と夜を区別したとされる。

1 ドル紙幣の裏面の左右には、ともに円で囲まれた2つの絵が描かれている。左側の円の中にはピラミッドがあって、その頂点には旧約聖書に登場する神の目が太陽光線を受けて輝いている。これは神が見た創世記の地球のイメージである。円の下には英語で THE GREAT SEAL (合衆国の印) と記されている。ピラミッドの上にラテン語で ANNUIT COEPTIS (我々の企てを支援する)、下に NOVUS ORDO SECLORUM (世紀の新秩序) とある。

ANNUIT COEPTIS は13文字、ピラミッドの階段も13階段である。13は合衆国建国時の州の数に一致する。「我々の企て」というのは、新しい国家 (米国) 建国のことであり、それは過去との決別を意味した。過去との決別は常に許されるわけではないが、米国建国に関しては「世紀の新秩序」として神の許しを得たわけである。

右側の円の中には、右手に13枚の葉をつけたオリーブを持ち、左手に13本の矢をもった鷲が描かれている。鷲は太陽を見ても目がつぶれない鳥であり、建国という行動を象徴している。また鷲は主神 (ゼウス) の分身でもあり、矢は権力の象徴、オリーブは平和の象徴である。鷲の頭上には13の星が描かれている (注4)。

1 ドル紙幣以外の高額紙幣の図柄は、最近大きく変更されたが、この複雑な図柄の1ドル紙幣だけは、伝統があるから依然として変わっていない。そこには建国の歴史に対する大変な思いが込められているのである。(以下次号に続く)

(注1) Graddol, D., [2004] *English Next* (British council)

(注2) 本論のドルに関する記述は、主として下記の文献に依拠している。

—Weatherford, J. M., [1997] *The History of Money* (Crown Publishers Inc.)

—Goodwin, J., [2003] *Greenback: the almighty dollar and the invention of America* (Henry Holt & Company)

—Cohen, B.J., [1998] *The Geography of Money* (Cornell University Press)

—William, J., et al. (ed.) [1997] *Money: A History* (British Museum Press)

(注3) Bryson, B., [1994] *Made in USA* (Secker & Warburg)

(注4) Lietaer, B., [2001] *The Future of Money* (Century)